

読書散歩

伊藤 順子

世の中、目立ちたがり屋もいれば、そうでないものもいる。その目立ちたがり屋が、大手を振ってまかり通っている風俗に腹が立つ。最近の本屋の店頭風景は、まさに現代風俗のその縮図にみえる。

けばけばしいタイトルの、どぎつい表紙デザインの、カタログ的な知識をつぎはぎした、商魂たくましい本が、本屋の一等席を占めている。私には、どうしようもなく活字世界への不信感がつのってくる。良書、悪書という選別は好まぬが、本屋は「地域文化の顔」であってほしいと思っている。

遊びと労働とが対立概念を喪失して、おもしろまじめの時代といわれる現代の無境界現象の中で、読書生活は呼吸困難におちいつている。

「一冊の本との出会い」という美しい夢に満ちたことばで語ろうと思った一文を、日頃の愚痴から始めてしまった。いやそれも、いま、本を紹介する意味について考えた精神的なしんどさから出た言葉である。それでも、これから述べる二、三の本は、本屋という怪物に八ッ当たり気味で読書散歩をして、その砂漠でみつけた小さなオアシスである。

昨年暮、「絵本にみる住宅と都市」という副題の本をみつけた。「絵本にみる……」ということばに興味をもった。タイトルは『こんな家に住みたいナ』

「うーん。楽しそうだな。ひとつ、お友達になってもらいましよう。」と、冬休みに読んで夢中にさせられた。

カバー画に、屋根裏部屋までいれて十軒の所帯が四階建ての集合住宅の中に描いてある。「楽天荘」とローマ字がみえる。ウィットがある。

気に入った本だと、自分だけのものだったらいいと思う癖があつて、この本にもそう感じた。

まえがきにかえてと題し、「想像力の種子をまく」と七ページ分にまとめているなかで、「絵本がつくり手と住み手ととり結ぶ『知』の道具となりうる。」ものであるとして、絵本を、この本の中心概念の装置に組みこんでいる大胆な発想がこころにくかった。絵本↓想像力↓建築↓都市論という図式で論旨を展開していこうとしているのが予測される。いずれにせよ、単なる絵本論でないだけに興味がつきなかった。

作者自身の原体験として、興田準一の「オモチャノクニ」を挙げ、「ゲンゲバタケ」を自然環境の象徴。「メガネ」を、来し方・行く末を展望する眼差し。それは、「ミタイトオモウ」イメージをうつし出す道具であると作品を解説しているところなど、記号論的で並の読み手ではないと感心した。バージニア・リー・バートン、センダック、「センダックの世界」を書いたレインズ、チャールズ・キーピング、ジョン・バーニングガムのことなど、数多くの作品が取り上げられ、それを縦横に駆使して、絵本というフィクションを、建築という具象的なものに結びつけていく新鮮な思考の回路に学ぶものがあつた。

このようにして、この本との交際は、読むというより、本と遊んでもらつた印象が強い。

この中には、住まいや町のことを主題にした絵本、というように書いてあるが、そんな狭さなど少しもなく、本邦で未訳のもの紹介などは、研究の対象として活用できるように思う。絵本論としてか、建築論としてか、あるいは、都市論・文明論として読むか、いわゆる記号

論的にクロスオーバーさせてみるのも、読み手の力量如何によっては参考になるはずだ。各章末に、出典が示されているので気に入ったものを注文して待つなど、読書の前の本探しの楽しさが味わえるのではないか。

作者は、都市住宅計画を専攻する京大工学部助手の延藤安弘氏である。余談であるが、建築家には文章のうまい人が多いようだ。吉田五十八氏の『饒舌抄』の「数寄屋十話」。白井晟一氏の『無窓』の「豆腐」。めし」。長谷川堯氏の『都市廻廊』の「荷風に関する数章」。あげればきりがなくらい。この人たちに共通するものは、建築という営みが生々しいほど人間的であり、生活者と一定の空間で「共生」しなければならぬという自己凝視の修煉が、文章の行間に人間的な温もりをひそめて、それが読み手である私に魅力を感じさせるのかも知れない。横道にそれってしまったが……、読書の醍醐味は横道にそれるところにあり、と思うのだけれど……。

ついでに、今年の三月に出た絵本論を紹介しておこう。黄色い表紙の『絵本の魅力——ビュイックからセンダッ

クまで——』吉田新一氏のものである。氏はイギリス児童文学の研究者であるから、さっきの本とは違って、純粋の絵本論である。二十五人の外国作家を、それぞれの特色で位置づけているのが参考になる。例えば、センダックは（絵が文を解く）。ブルーノ・ムナリーは（グラフィック・デザイナーの絵本）バートンは（絵と文の有機的な空間構成）。といった具合である。

吉田氏は、この本の冒頭で、自分の長男（三才）の絵本を読んだ体験を書いている。二人で始終読んでいたはずの『手ぶくろ』（ラチョフ作）の絵の中の小さな変化に気づいた長男の行為を、絵本の絵を「探すように見る」ものなのだというように捉えている。それを、絵本の「絵のストーリー性」という視点として、以下の作品論を展開している。私は、日常の見過ごしてしまいそうな子どもたちの興奮にも、意味ある情報を選別しなくてはと改めて考える。

そろそろ私の読書散歩も終りになった。ここでは、ベテルハイムとカレン・ゼランの共著になる『子どもの読

みの学習』を開いてみることにする。

もうベテルハイムの名は、障害児教育と同義ぐらいに知られている、その道の権威者である。また『昔話の魔力』の著者としても有名である。

私がこの本をすすめたい理由の一つは、取り上げられている国語の事情が、日本と米国では違うとはいいなから、読みの教育をどうとらえていくかを、もっと日本でも考えていく必要があるからなのである。

この本でいう、「子どもをリテラットな人間にする。」という命題は、生涯教育の観点から充分に納得いく提案である。リテラットな人間とは「読書の楽しみを手に入れ、生涯を通じて本を読む人間、本との対話によって自己内充実を図る人間のことである。」という。

それでは、読みの教育、なにかんなく、現在すすめられている「読みの教育」が、それを保障しているといえるのか、ということ子ども事例から興味深く問うている本である。そして、意味に重点を置いた指導を強力にすすめなければならぬとしている。

私は、特に第二部の第六章「子どもの読み違いを理解する」

七章「読み違いと教師」八章「読みの力を高める読み違い」を力を入れて読んだ。「読み違いにはこだわらず……読み違いは書かれていることに対する意識的または前意識的反応によるものであることを理解し、その認識を適用して望ましい結果を生むことができる。」などのように、読み違いについてあらゆる角度から追求し、そのことから教師の指導的態度が変容していくことが述べられている。教師という性格から、常に正確なものへと指向する習性の落とし穴にはまらぬためにも、この本は一読の価値を持つ。それでは、この辺で読書散歩もブレイクタイム……。

(田園調布小学校)

(書名)

(著者)

(出版社)

(定価)

こんな家に住みたいナ

延藤安弘

晶文社

一八〇〇円

鏡舌抄

吉田五十八

新建築社

二二〇〇円

無窓

白井晟一

筑摩書房

二八〇〇円

都市廻廊

長谷川 堯

相模書房

二九〇〇円

絵本の魅力

吉田新一

日本エディタースタール出版

一八〇〇円

子どもの読みの学習

B・ベテルハイム、K・ゼラン

法政大出版

一九〇〇円